

## レズビアン表象の彼方に

——三島由紀夫『暁の寺』を読む——

武\* 内 佳 代

### はじめに——テキスト表象としてのレズビアン

燃えてゐるなめらかな腿と燃えてゐる頬が睦み合ひ、柔らかな腹が月夜の湾のやうにしのびやかに波立つてゐた。(44章)

これは、三島由紀夫『豊饒の海』四部作の第三巻『暁の寺』(新潮)68年9月—70年4月)に描かれたレズビアン・ラヴからの切り取りである。三島は連載中、この結末近くで露呈するレズビアン関係が本作のテーマだと明言している。<sup>(1)</sup>だが作家の力点に反して、男性同性愛に比べ女性同性愛があまり認知されない従来の日本の社会状況と連動するよう、過去の評論や論考の大半は本作のレズビアンに対してほぼ無関心だったといつていい。もつとも、そうした無関心は社会状況というよりも、むしろ異性愛と同性愛の間をつねにスキャンダラスに揺れ動いてきた三島による身体表象／テキスト表象への読み手側の関心に多く由来しているよう。

その描き方にも問題がないわけではない。主人公本多繁邦の覗き見趣味の眼差しなのか、内面性が描出されることなく、ただ赤裸々な睦み合いだけが映し出されていくレズビアンたちの表象は極めてポルノグラフィのそれに近い。そのため、ときに言及されても、「同性愛の行為に照明が当てられているだけで、心理的な屈折はまったく説明されていない」<sup>(2)</sup>、「即物的(異物的)」<sup>(3)</sup>などと一蹴されるしかなかった。だが近年、フェミニズム的な文脈からの再評価も行われている。なかでも、はやく有元伸子が、本多の眼差しによってジン・ジャンが(オリエントの女)として抑圧的に表象されることを明らかにし、さらにそのレズビアニズムを「ジン・ジャンの、欲望する主体の「真摯さ」が表出された、男性的な権力に覆われていたテキストの裂け目」と論じたことが注目される。<sup>(5)</sup>

たしかにフェミニズムにおいて、女性同士の主体的かつ性的な絆としてのレズビアンは、しばしば家父長制下の性差別と異性愛主義の双方への抵抗の表象とみなされてきた。だが他方、それは性科学言説などにおける病理、あるいは転生研究における転

生の証拠、といったかたちで既存の異性愛主義言説に回収されやすく、とりわけセクシュアリティが強調される場合にはポルノグラフィックな「男の快楽と好奇」<sup>(7)</sup>に晒されることを免れない。それゆえフェミニズムの見地からレズビアン表象に殊更にラディカルな抵抗性をみてとる場合、むしろ、その表象が異性愛イデオロギーやポルノグラフィといった父権的な眼差しに領土化される危うさを後景化、不可視化しかねないともいえる。このような「既存の体制による占有と、それに対する異義申し立てのあいだを複雑に揺れてきた」<sup>(9)</sup>実際のレズビアンたちの表象につきまとうアポリアは、そのまま本作のようなテキストとしてのレズビアン表象を論じる際の葛藤や困難にも通じていよう。

以上のようにフェミニズム的な文脈でレズビアンを論じる際の葛藤や困難を明確化したうえで本稿が改めて強調したいのは、本作のレズビアンがあくまで文学として描かれたテキストであることだ。文学テキストである限り、良くも悪くもそれがいかなる表象を発動するかを、フェミニズムなどの思想的枠組みの援用に先立って、まずは本作の記号表現や文脈に照らして検討することから始めたい。思うに、レズビアンというモチーフにフェミニズム的な分析軸を前もって導入してしまうと、レズビアン表象以外のテキスト表象の可能性を予め封じ込めることになりかねないからである。このレズビアン表象以外の表象可能性とは、具体的にはメタファーやアレゴリーといったテキストがもつ多様な解釈の可能性のことをさし、本稿の眼目はその提示にこそある。<sup>(11)</sup>結論を先取りすれば、本稿は、『暁の寺』のジン・ジャンと久松慶子の表象の特異性を目を向けることで、彼女たちのレズビアン関係がセクシュアリティの問題とは位相を異にして、戦後日本のナショナル・アイデンティティを寓意的に表象しうることを論じる。また、そうした表象可能性がレズビアン表象そのものの可能性とどう連動しうるかも検討する。本稿はこうした議論を、テキスト表象としてのレズビアンを

〔キーワード〕三島由紀夫『暁の寺』／レズビアン／テキスト表象／他者／戦後

\*平成一七年度生 国際日本学専攻

論じるといふこと、それ自体の一つの実験的な試みとしたいと考える。

## 一、眼差しに醸成される〈日本〉

本作の語りは、ほぼ本多に内焦点化され、ジン・ジャンには一切内焦点化されない<sup>(12)</sup>。ここではまず一方的にレズビアンを映し出す、この物語上特権的な位置にある本多の眼差しの性質について検討しておこう。

第一部は、本多の一九四一年のタイ・インド旅行に大半が割かれている。ここでは、「勲の死ほど、純粹な日本とは何だらうといふ省察を、本多に強ひたものはなかつた」(2章)とあるように、本多の思考はつねに、第二巻『奔馬』の転生者飯沼勲が夢に描いた「純粹な日本」像の模索に囚われている<sup>(13)</sup>。たしかに、ときに本多は、「自分をかうして生きのびさせてゐる力」、すなわち自己のアイデンティティの拠り所を、「西洋の力」「外来思想の力」と強く自覚したり(2章)、日帝の威を借りる財閥企業「五井物産」の「南方外地の日本人の紳士連」の「醜さ」を自身に重ねみたりもする(10章)。しかし、そうした思念にしても、「あの美しかつた清顕や勲と同じ日本人とはとても思はれない」(10章)という風に、本多自身が体現する西欧化・帝國主義化した現実の近代日本からの差異化／純化によつて、かつて勲が追い求めた「純潔」(2章)や、清顕や勲が醸した「美」(10章)としての〈日本〉像へと収斂される。このように戦前の本多は、在タイの財閥企業家や弁護士である自身が体現する現実の日本を見据えつつもなお、とりわけ勲によつて希求された本質主義的な〈日本〉を固定観念化していく。

さて、このように「西洋の力」の内面化に自覚的な本多の眼差しが映し出すタイやインドは、サイード的なオリエンタル表象<sup>(14)</sup>の域を出るものではない。また、たしかにどちらの国も、本多の想像体としての〈日本〉を「逆光のもとに示す」要件となつている<sup>(15)</sup>。だが、それらのトポスには看過できない偏差もある。たとえばインドのほうは、聖／俗入り交じる極端に「神聖」なトポスとして表象し、そこで本多は、勲の夢見た日輪を目撃したり(8章)、勲と初めて邂逅した三輪山の滝へと通じるような究極の滝を発見したりする(9章)。つまり本多にとつてインドは、純粹なる〈日本〉という想像体の源泉として存在し、〈日本〉を表から補完する機能を果たす。一方、本多はタイを次のように思考する。

タイのやうな国へ来てみると、祖国の文物の清らかさ、簡素、単純、川底の小石さへ数まへられる川水の澄みやかさ、神道の儀式的清明などは、いよいよ本多の目に

明らかになつた。(中略)あのあまりにも簡勁素朴な第一義的なもの、あの白絹、あの真清水、あの微風に揺れる幣の潔白、あの鳥居が区切る単純な空間、あの沖津磐座、あの山々、あの大わたつみ、あの日本刀、その光輝、その純粹、その鋭利から、終始身を躲して生きて来たのである。本多ばかりでなく、すでに大方の西欧化した日本人は、日本の烈しい元素に耐へられなくなつてゐた。(2章)

「祖国の文物の清らかさ、簡素、単純」などを「明らかに」する「タイのやうな国」、すなわち〈東南アジア〉というトポス<sup>(16)</sup>は、さきのインドとは違い、差異化されることによつて、いわば裏側から〈日本〉を補完する役目を負わされる。また右の引用にもあるように、この〈日本〉像は、第一部において三輪山の「白絹」「鳥居」「沖津磐座」といった神道に関する事物にくりかえし断片的な象徴化がなされる。本多がそうした〈日本〉を、別の箇所で、「いわばメナムの濁水を、白絹の漉袋で漉した」(2章)と喩えることから明らかになるのは、そうしたタイからの差異化がほかでもない純化<sup>(17)</sup>を包含することである。ここには、インドを上位、タイ(東南アジア)を下位とする、本多の序列化がみてとれよう。

だが、さらに注目すべきは、そうしたタイとインドとの境界が、ときに本多のなかで曖昧化されることである。たとえば第一部の旅中、カルカッタの寺院が「バンコックの暁の寺を今にして思ひ出させ」る(7章)ことや、逆にバンコックの港の川水が「印皮度であれほど夥しく見た癩者の円滑の肌を思ひ出させ」る(10章)ことなどにそれが表れている。そして第二部では、そのようなトポスの混在こそがジン・ジャンの身体性へと集約されるのであるが、これは次章で詳述したい。

以上のように戦前の本多は、インドをその純粹なる源泉のトポスと見立てつつ、一方で、現実の近代日本と〈東南アジア〉という二つのトポスから差異化／純化させることによつて、本質主義的なまつたき〈日本〉を観念として醸成する<sup>(17)</sup>。

## 二、神秘化される〈アジアの女〉の身体

一九五二年の戦後日本を主な舞台とする第二部では、醜悪な覗き見常習者に変貌している本多が、ジン・ジャンの裸体を覗き見ようとする様子がメインプロットとなつてくる。この「やや唐突」ゆえに「第三巻にいたつて生じた重要な変化」とされるプロットの奇異さこそ、先述のように戦前の本多が思弁的に醸成した〈日本〉とのつながり

を見いだす指標なのではないか。

ところで、本多の覗き見は、転生者の証しである黒子の有無の確認というよりもむしろ、「今の姫の糸纏はぬ裸をすみずみまで眺め」、「すべての成熟の用意ができあがつたところを点検して、幼ない姫の肉体との比較に心をのかせたい、といふだけ」(30章)の、極めてセクシユアルな快楽を期待したものである。こうした眼差しの中で、ジン・ジャンは豊かな胸や太股、漆黒の髪や瞳、野生の匂いといったエキゾチズムに彩られたセクシユアルな身体として、くりかえし断片化され、タイの「密林の暈気」(30章)や「灼熱の日ざし」(36章)、あるいは、インドの「アジャンタ洞窟寺院の壁画の女神たち」(30章)などと結びつけられていく。つまりジン・ジャンの身体は、熱帯・神秘・肉体といった共通イメージのもとでタイとインドとが混在化・等質化された、いわば〈熱帯としてのアジア〉という本多の観念上のトポスと接続されるのである。それが地政学上のパワー・ポリティクスとジェンダー・ポリティクスの二重の抑圧が交差した典型的な〈オリエントの女〉の表象であることはすでに拙稿<sup>19)</sup>で詳述したが、オリエントのなかでも彼女がとくに〈熱帯としてのアジア〉と結びつけられているとするなら、やや乱暴な表現ではあるが、それを〈アジアの女〉の表象と換言することもできよう。だが転生者の可能性という物語上の特権性や、それを強化するような王権・若さといった美学的な特権性の付与は、そうしたジン・ジャンの表象のポリティクスを神秘性というプラスイメージで覆い隠す回路ともなっている。では、本多の眼差しの中でジン・ジャンがどのように〈アジアの女〉として神秘化されていくかを可視化しておこう。まず、インド滞在中の本多はインドの女神カーリーの夢をこのように見ていた。

夢にさまざまな事象があらはれた。(中略)あの清らかな三輪山が忽然とあらはれたかと思ふと、山頂の沖津盤座の、寝乱れた恐怖の岩の寝姿、その岩の裂け目から血が迸り、赤い舌を垂らしたカーリー女神が姿を現じたりした。(中略)すべての観念、すべての神々が、力をあはせて巨大な輪廻の環の把手をまはしてゐた。(8章)

この夢では、前章の引用にもあった本多の想像体としての〈日本〉の断片的なアイコン、「三輪山」「沖津盤座」いった事物と「カーリー女神」とが、「巨大な輪廻の環」すなわち輪廻転生という強力なコードのもとで接続されている。このように〈日本〉とイメージ的に結びつけられたカーリー女神は、さらに第一部の終わり近くにいたると、本多の仏書の照合によって「孔雀明王の原型」と定位される(22章)。この夢を介した連想は、

本多をして孔雀明王を「俄かに心そそるもの」とさせ(22章)、やがて第二部で本多が「足下の地が割れて、金色の衣裳の月光姫が、金色の孔雀の翼に乗つてあらはれた」夢を見るにいたると(39章)、孔雀明王の神秘的な形象をジン・ジャンの本源的な姿と執拗に夢想するようになる。いうまでもなく、このような本多による理想化は、〈アジアの女〉としてのエキゾチズム、王権の所有、十八歳という若さ、といったジン・ジャンの国籍(人種)・性別・階級・年齢という外的要因はもとより、さらに「一連の転生の流れと何の関わりもない一個の少女であつたとしたら、これほど魅惑されることもなかつた」(32章)とされるように、彼女の転生者としての可能性に大きく依拠している。

つまり、ここでも、『豊饒の海』四部作全体のマスターコードである「夢と生まれかはり」<sup>20)</sup>が、強力な神秘化の磁場として作用している。そして、この磁場はとくに本作の第一部後半、戦時中の本多の熱心な輪廻転生研究によってより強化されたとみることができるといえる。それがゆえに第二部、戦後の本多の眼差しは、戦前に転生者勲のナシヨナリスティックな欲望を引き継いで醸成した〈日本〉像を容易にカーリー女神や孔雀明王のイメージへと変奏させ、やがてそれを転生者ジン・ジャンの身体にまで敷衍させていくのだから。

こうして戦後の本多はあたかも清頭と勲をめぐる夢と輪廻転生の物語の連続性を保持するかのようになり、〈日本〉⇔カーリー女神⇔孔雀明王⇔ジン・ジャンという等式を固定観念化していく。第一部の当初、想像体としての〈日本〉の必要条件が〈東南アジア〉からの差異化/純化だったことを考えれば、まぎれもなく東南アジアの王女であるはずのジン・ジャンの身体に〈日本〉を接続させていくこの眼差しの一連の変奏は、むしろ作品の支配的な磁場による変調、といったほうが適切である。いずれにせよ、この変調のコンテクストこそが、戦後ジン・ジャンを病的に覗き見ようとする第二部のプロットに、理想としての〈日本〉を戦後社会に希求せずにはいられない本多の強迫観念を寓意的に読み解くことを可能にするといえる。本多の窃視は「輪廻転生に関する本多の探究心と、ジン・ジャンの肉体に対する執着とがなまじり、不透明な印象を残す」とも指摘されるが、そうしたプロットの不可解さこそ、何らかの寓意的な読みを誘い出す指標と解せよう。では、このような寓意性を秘めた眼差しに覗き見られる〈彼女たち〉の一人、久松慶子に目を転じてみたい。

### 三、アメリカを欲望する〈戦後の女〉

「みごとな檜林をお造りになつたのね。以前はこのへんは木一本立つてゐない荒地だつたのに」／＼と本多の新しい隣人は言つた。(23章)

久松慶子は、このように第二部の冒頭、すなわち五二二年に、初めて本多の新築の別荘の隣人として登場する。この〈戦後の女〉ともいうべき慶子は、幼時からの西洋風的生活が染みついた「日本／西洋といった対立をものみこんだ異種混交性」<sup>(24)</sup>に満ちた特異な存在であり、戦後はP.Xに頻繁に出入りし(23章)、米兵たちとの親しさから友人のミス・マヌエラに「アメリカくさいわよ」とからかわれる(33章)など、極端にアメリカナイズされた日本人女性である。次のような彼女の特質は、それをさらに端的に示す。

久松慶子は堂々たる婦人だつた。／＼五十歳に垂んとしてゐたけれども、整形美容をしたといふ噂のあるその顔に、些かはりつめすぎ光沢のよすぎ若さを持してゐた。吉田茂にもマッカーサー元帥にもぞんざいな口をきける、まことに例外的な日本人で、とつづく昔に離婚してゐた。このところ彼女の情人は、富士の裾野のキャンプに勤務するアメリカ占領軍の若い将校であつた(23章)

「整形美容」が囁かれる慶子の「はりつめすぎ光沢のよすぎ若さ」を湛えた顔立ち、資生堂式美容術で名高い小幡恵津子が戦前のニューヨークで邂逅したとされる、「皮膚には皺は少しもなく、どんなに見なほしても三十二三歳より以上には見え」ない顔面縫合手術(Facelift)<sup>(25)</sup>後の老婦人のそれを彷彿とさせる。したがって慶子に噂された「整形美容」とは、大正以降、日本で隆盛した二重まぶた術や隆鼻術などの〈白人〉化の施術ではなく、とくにアメリカで盛んだつた顔面縫合手術である可能性が高い。ならば、それはアメリカを想起させる記号とみなしうる。実際、本作の連載当時、三島自身、「美容整形」の思想が、未来社会の一つの重要なモラルになりさう」であり、「さういふ時代の代は、アメリカにはかなりの程度に来てゐる」と時代の声を代弁した。<sup>(27)</sup>つまり同時代の読者にあつては、そもそも「整形美容」という記号自体がそうしたアメリカのイメージをはらんでいたのだ。

また、世界的にみて明治三〇年代前半以降、離婚率が比較的低水準の日本<sup>(28)</sup>に対し、ア

メリカが「どこの国よりも一貫して優勢<sup>(29)</sup>」な離婚率を示してきた離婚大国であるという周知の事実を考えれば、いうまでもなく慶子の「とつづくの昔」の離婚歴もまた、同様のイメージをもつ。さらに「アメリカ占領軍の若い将校」を恋人にもつ彼女は、別の箇所、周囲の日本人たちから、その米兵の「ひどく巨きかつた」尻と彼女の「堂々たる臀とどちらが巨きいか比べ」られてしまふ(26章)ほど、アメリカ人に匹敵する身体性をも帯びている。このように、整形美容、離婚歴、米兵との奔放な恋愛、日本人離れした身体など、徹底的にアメリカナイズされた日本人女性として描かれた〈戦後の女〉慶子、それはあたかもアメリカに近づこうとする戦後日本、アメリカを欲望する戦後日本そのものを表象しているかのようだ。

とくに、この〈戦後の女〉慶子が、「吉田茂にもマッカーサー元帥にもぞんざいな口をきける」のは意味深長である。戦後日本の再編政策において、吉田がGHQ最高司令官(SCAP)マッカーサー率いるアメリカ占領権力の「下請け人」「よき敗北者」として親密な関係を築いていたことはあまりに有名であり、歴史学者ジョン・ダワーは、そうした彼らの関係が築き上げた戦後日本社会の様態を、総司令部と日本政府との合作による「スキヤップニーズ・モデル a SCAPanese model」とまとめる。<sup>(31)</sup>慶子が、吉田やマッカーサーと「ぞんざいな口をきける」ほど親密であるとするなら、彼女は、彼らが構築したスキヤップニーズ・モデルそのものに隣接し、アメリカに従属的な戦後日本の様態そのものを代理Ⅱ表象する、「例外的な日本人」として解釈できよう。

さきに触れたように、慶子が登場する第二部冒頭は五二二年の春に始まる。いうまでもなく同年四月二十八日には、前年に吉田が調印したアメリカ主導のサンフランシスコ条約が発効・施行され、GHQ/SCAPによる占領が表面上は終わりを告げる。これ以降、日本はさらにスキヤップニーズ・モデルを土台としてアメリカとの親密度を強め、政策・文化など多岐にわたって急速にアメリカナイズされていくが、その結節点ともいふべき時期に、極端にアメリカを欲望する慶子が現れるのは象徴的である。また、終戦直後のマッカーサーと天皇との会見写真に指摘されるように、戦後アメリカが日本に女性ジェンダーを配置することで、占領国(戦勝国)／被占領国(敗戦国)の関係をポリテイククに示すことがあつたことを念頭におけば、本作において、戦後にアメリカナイズされるのが日本人女性であり、加えて彼女の恋人の米兵が〈男〉を意味するジャックという名であることも、一つのポリテイクスの表象となる。つまり、こうした本作の諸設定は慶子における〈アメリカを欲望する戦後日本〉の表象可能性をさらに鮮明化させるのだ。<sup>(33)</sup>こうした慶子の表象可能性はさきのジン・ジャンのそれ

と相俟って、レズビアン・ラヴの表象を一体どう拓くだろうか。

#### 四、レズビアン表象の彼方に

六〇年代初頭、経済学者の小島清が「日本の貿易の基本線」を「アメリカ、日本、東南アジアという関係をどう調和的に保つていくか」に見出したように、すでに一九五一年までに日本経済は「アメリカ経済および東南アジア経済としつかり統合されるべきもの」となっていた。岩淵功一はこうした経済状況を戦後日本のナショナル・アイデンティティーの問題にひきつけて次のように論じる。岩淵によれば、日本が戦後まもなく「日本の自画像形成とナショナル・アイデンティティー構築に中心的役割」を果たしたアメリカの主導のもと、東南アジアをアジア外交の中心に据えたことによって、「日本の優位性と特殊性を同時に立ち上げられるものとしての、互いに相いれない想像体の三項関係、アジア—日本—西洋という枠組み」が九〇年代まで日本の文化的・思想的な土台となったとされる。また阿部潔はこれをやや二分法的に言い換えて、「戦後日本という「自己」は「同一化すべきアメリカ／他者化すべきアジアという二つの「他者」との対照的な関係を基本的な条件として、自らのアイデンティティを形成してきた」とする。このようにアメリカ主導の戦後の経済再編において日本は、アメリカと東南アジアという異なる偏差をもった、いわば二つの（内なる他者）<sup>(36)</sup>を内部に抱え込みながらナショナル・アイデンティティーを構築したのである。すなわち戦後日本のナショナル・アイデンティティーは、アメリカを上位、東南アジアを下位とする経済的布置のもと、日本の先進性に保証を与えるアメリカ、および、アジア／オリエントとしての日本の神秘性に保証を与える東南アジア、という双方への同化願望をつねに両輪としながら構築されていった。むしろそれは、片方に同化する際には他方を他者化することによって、矛盾なく自国の優位性と特殊性を打ち出していくという歪んだ同一化／他者化のプロセスであった。

『暁の寺』に戻ろう。本多の覗き見の視界のなかで、本多の性欲望をなぞるようにレズビアンたちの絡み合いがセクシユアルに映じる場面の最初にはこうある。

仄明りの下にはなほだ複雑に組み合わせられた肢体が、すぐ目の前のベッドにうごめいてゐた。白いふくよかな体と浅黒い体が、頭の方を異にして、放恣の限りを尽くしてゐた。(44章)

本稿はすでに、本質主義的な（日本）を希求するオブセツションを本多の窃視に読みとってきた。ならば戦後そこに映しだされた、（アジアの女）を表象するタイ王女ジン・ジャンの「浅黒い」身体と、そして、アメリカナイズされる戦後日本を代理<sup>II</sup>表象する（戦後の女）慶子の「白いふくよかな」身体、それらが「複雑に組み合わせられた」彼女たちレズビアン<sup>III</sup>の姿態には、本多の欲望する（日本）像を挫くような、さきに触れた戦後日本のナショナル・アイデンティティーの実相を透視できるのではあるまいか。なるほど、本多の眼差しのレベル、あるいはそれを内面化する読者の眼差しにとつては、それはレズビアン<sup>III</sup>のセクシユアルな表象でしかない。だが本多の視点の特権性をむしろ逆手にとつて、ここまでの読みのコンテクストに照らすならば、戦後日本がナショナル・アイデンティティー構築のプロセスで抱え込んだ、東南アジアおよびアメリカという周到に絡み合った二つの他者、すなわち二つの（内なる他者）の表象可能性が拓かれるといえよう。

もつとも、たしかに同じ（内なる他者）とはいえ、戦後日本にとって（ネオ）コロニアルに結びつけられた東南アジアとアメリカとの間には、その優劣の位置づけに大きな隔たりが存在する。だがその序列こそ、彼女たちの年齢や体格の格差、さらには本作につづく『天人五衰』での彼女たちの位置づけの格差となつて象徴的に表れている。すなわち、堂々たる体格の熟女である慶子が第四巻ではさらに重要なキーパーソンにせり上がるのに対して、他方、細かい少女ジン・ジャンは本作結末の死によつて物語を早々に退場させられるという、その対比にある。

こうして神秘の熱に浮かされながら、勲が理想とした純粋な（日本）をジン・ジャンに垣間見ようとした本多の欲望は、彼女たちレズビアンという（内なる他者）に直面したことによつて、ひとつの挫折を迫られる。レズビアン関係を目撃して「恋の帰結がこんな裏切りに終つた」(44章)という本多のジン・ジャンへの欲望の頓挫は、より寓意的に読めば、彼女たち（内なる他者）の顕現によつて、戦後社会に夢見られた本多の想像体としての（日本）というマトリクスが内部から穿たれ、その虚構性が露呈させられたことと解釈できるのである。日本・アメリカ・東南アジアの経済統合が五一年までに成立していたことを思い返すなら、その翌五二年に、戦後新築された別荘の一室という、いわば本多の理想郷の内部で彼女たちのレズビアン関係が露呈するという舞台設定は、そうした読みを補完するだろう。

ここで、そうした（日本）を穿つ（内なる他者）としてのレズビアン<sup>III</sup>の姿にこそ、本多がジン・ジャンに転生者の証しの黒子を発見し、「おのれの目を矢で射貫かれたや

うな衝撃を受け」(44章) たことは興味深い。禁忌の侵犯というかたちで天皇という神への愛に殉じたともいえる『春の雪』の清顕、その欲望を引き継ぐかのように天皇への愛に殉じる『奔馬』の勲、そしてつづく本作でその欲望を継承したのは転生者ではなく本多だった。本多の窃視症を戦後に「日本」を垣間見んとする行為とみなすなら、それは、清顕・勲・本多という男たちの絆における、天皇へと向かう欲望の継承と読み替えられる。そうしたホモ・エロティシズムの気配すら漂わせる「彼ら」のナシヨナリステイックな欲望の連続体、それが本作の「彼女たち」レズビアンという「内なる他者」によって切り崩されるとき、あたかもそれを象徴するようにジン・ジャンが「彼ら」の欲望を継承する本来の転生者として違和的に現出し、欲望をつなぐ本多の目を「射貫」(44章)くのである。

こうした「彼女たち」の「内なる他者」の表象可能性は、そのラベリングされた国籍・人種的な他者性のみならず、当時の(そして現在でも)日本国内にあって性差別と同性愛差別の交差によって極めて周縁化されたレズビアンという表象それ自体の他者性とも響き合う。竹村和子によれば、そうしたレズビアン表象の他者性は、「強制異性愛の言語のただなかに存在する、ノイズ、私たちの文化内部のズレ」——その文化の内側にあって、文化の不動性をゆすぶる差異の「横滑り」たりうるといふ。黒子が顕現したレズビアン、そうしたジン・ジャンはまさに三巻にわたる異性愛物語の深層に潜んでいた男性たちの絆の物語の内部にあるズレ／ノイズの表象であり、かつ、語り手／視点人物／読者の共犯的な男性権力的眼差しのもとで作中に生成されていく想像体としての「日本」を内破するズレ／ノイズの表象であるといえよう。そのようなレズビアン表象の可能性と、テキスト表象としての「彼女たち」の表象可能性との共振こそが、結末近く、戦後の別荘という本多の理想郷をもの見事に焼失し消失させる(44章)——。

### おわりに——最終章、そして『天人五衰』へ

ここまで、テキスト表象であることに重きをおきつつ、『暁の寺』のレズビアンたちに戦後日本の「内なる他者」としての表象可能性を提示してきた。それは、テキスト表象としてのレズビアンを一度レズビアン表象の制限から解き放ち、その表象の可能性を開拓するという試みであると同時に、作家の意図に問わず、戦後日本に内在してきた「他者」という問題性を『暁の寺』に新たに見出す試みでもあった。

最後に、最終章にも簡単に触れておく。ここでは、ジン・ジャンと瓜二つの双子の

姉がバンコクの「アメリカ文化センター長をしてゐたといふ米人」(45章)の妻として登場する。ここまでの読みのコンテキストにおいて看過できないのは、米人の妻という、いわばアメリカ人化したジン・ジャンの代補として登場する姉と、本多との邂逅の場所が、ほかでもない「東京の米国大使館」(45章)という日本の「内なる外部」だということだ。舞台がすでに高度経済成長を遂げ、経済レベル、精神レベルにおいて一層アメリカ(主導)化した一九六七年の日本に移っていることを考え合わせれば、このジン・ジャンと本多との再会もまた、当時の日本のナショナル・アイデンティティを寓意しているとみなしうる。そうした結末部は、ホモ・エロティックな転生の夢に浮かされながら戦後日本社会に普遍的な「日本」を求めてやまなかつた本多自身もまた、やがては現実的な時代性に直面し回収されていくことを如実に物語っているといつていい。そうだとすれば、レズビアン・シヨックから『天人五衰』の虚無的世界までの距離はすでに近いといえる。

### 註

- (1) インタビュー記事「著者との対話 数奇なドラマ展開」(名古屋タイムズ) 86年12月16日)のなかで三島は、「第三巻の『暁の寺』はいま書いているが、これはレズビアンがテーマ」と語っている。
- (2) ミナコ・マイコウィッチ「同性愛」(三島由紀夫事典、明治書院、76年)
- (3) 大森郁之助「春子」と「暁の寺」の間の虚空——三島由紀夫の *Lesbianism* の位相についての一仮説」(札幌大学女子短期大学部紀要) 93年3月) 9頁
- (4) 有元伸子「豊饒の海——物語る力とジェンダー」(国文学解釈と教材の研究) 00年9月)、奈良崎英雄「隠蔽された転生者——『暁の寺』における転生の表象——」(昭和文学研究) 03年3月)。ともに、異性愛主義≡男性権力を超越するものとしての女性の主体性の回復を読み込み、フェミニズム的な文脈からの再評価をしている。
- (5) 有元(注4前掲) 89頁
- (6) これまで同性愛は男女を問わず、性科学や精神分析学において病理化されたり、また、前世が男だったために現世で女を愛してしまうといったような異性への転生の証明とされたりすることによって、しばしば異性愛主義言説に回収されてきた。たとえば奈良崎(注4前掲)は、本作のレズビアンを転生の証明と性不同一という病理とに直結させて、「レズビアンであることと転生者であることは

必ずしも無関係に存在しているのではなく、いずれも月光姫の性的不同一性の表象であった」(29—30頁)と論じている。

(7) 有満麻美子「レズビアン／フェミニズム」／レズビアン・フェミニズム」(「Image」) 91年8月) 66—67頁

(8) ボルノグラフィによるレズビアン表象の領土化が日本でも深刻であることは、掛札悠子「レズビアン」である、ということ」(河出書房新社、92年) 9・14・42—43頁が論じる。

(9) 竹村和子「レズビアニズム」(『岩波女性学事典』岩波書店、02年)

(10) こうした葛藤も含め、レズビアンをめぐる問題については、竹村和子「レズビアン研究の可能性」(3) フェミニズムとの関わり」(『英語青年』96年9月) 26—28頁、大脇美智子「ラディカル・フェミニズム／「女に同一化する女」／レズビアン連続体／シスターフッド／政治的レズビアン／分離主義／ゲッター化」(『ポスト・フェミニズム』作品社、03年) 213頁が参考になる。

(11) 三島自身が「今日のやうに三文小説逆レズビアンばかりになるとは、全く目算ちがひでした」(坊城俊民宛書簡、69年3月12日。全集38、873頁)としたように、本作連載当時、レズビアン・コミュニティが表立って活動を始めると同時に、一方で大衆向けの小説や週刊誌、風俗ショーなどで、ボルノグラフィックなレズビアン・ファンタジーが量産・消費される時代を迎えていた。そうした時代状況を加味すれば、たしかに本作の性愛に特化されたレズビアンの表象は、何よりもまずボルノグラフィに回収される危険性が論じられなければならないまい。だが紙幅と本稿の主旨の都合上、ここではそれを指摘するにとどめる。

(12) 田崎英明「オリエンタリズム」(『春の雪』「奔馬」「暁の寺」「天人五衰」から) (『国文学解釈と教材の研究』93年5月) 45頁、柴田勝二「暁の寺」と唯識論—豊饒の海—への視角—」(『日本近代文学』99年5月) 100頁など。

(13) 若森栄樹「『豊饒の海』—物語の構造」(『国文学解釈と教材の研究』93年5月) 118頁は、「タイに行っても、インドに行っても」本多が考えていることは「日本」の「本質」についてだと指摘している。

(14) エドワード・W・サイード「オリエンタリズム」上、今沢紀子訳(平凡社ライブラリー、93年、原著78年) 17—21頁は、「オリエント」を、植民地主義のもとで「支配し、再構成し威圧するため」に「ヨーロッパ人の頭のなかでつくり出された」地域概念と定位している。

(15) 若森(注13前掲) 118頁

(16) 本作ではタイを「南方」「東南アジア」(12章) という呼称で括っている。「東南アジア (Southeast Asia)」は第二次大戦後に国際的認知を得た呼称であるが、日本では、すでに大戦以前から今日と同様の「東南アジア」という地域概念が構想され、「南方」「南洋」とともに言い習わされてきたとされる(清水元「東南アジアと日本」、『岩波講座東南アジア史』第6巻、岩波書店、01年)。よって本作第一部は大戦中だが、「東南アジア」とした。

(17) この本多の思弁的な(日本)像は、日帝が掲げたそれとは距離をおいた特異なものである。こ

した(日本)像と晩年三島が理想とした「日本」像との距離については今後の課題としたい。

(18) 先田進「三島由紀夫の『視見』の論理—『豊饒の海』第三巻「暁の寺」論—」(『人文科学研究』92年7月) 1頁

(19) 拙稿「三島由紀夫「暁の寺」にみるサロメ表象—月光姫再考の機縁として—」(『国文』05年12月) (20) 三島由紀夫「私の近況」『春の雪』と「奔馬」の出版」(『新刊ニュース』68年11月) が「夢と生まれかほりを基調にした四巻物」(全集35、295頁)と説明するように、それらは四部作の連続性を支えるコードとなっている。

(21) 久保田裕子「『暁の寺』の二つの時代—三島由紀夫のタイ国取材の足跡から—」(九州という思想』07年3月) は、タイ近代史の王権の物語に注目し、本作に描かれる日本が、「無作為に選ばれた」「外国」や「南洋」という曖昧な表象ではなく、「とりわけタイと「強固な結びつき」をもつことを論じている。この視点は、本多によってタイ王女の身体が(日本)と接続されるという本稿の読みとも繋がるだろう。

(22) 拙稿「三島由紀夫「暁の寺」、その戦後物語—覗き見にみるダブルメタファー—」(『お茶の水女子大学人文科学紀要』02年3月) では別の角度からこれを論じた。

(23) 佐藤秀明「三島由紀夫—人と文学」(勉誠出版、06年) 229頁

(24) 有元(注4前掲) 88—89頁

(25) 小幡恵津子「整容」(大地社、40年) 29頁

(26) 工藤恵「白人」イメージの大量消費—大正・昭和初期の美容整形広告を中心に—」(『イメージ&ジェンダー』03年12月) 61頁

(27) 三島由紀夫「美容整形」この神を怖れぬもの」(サンデー毎日) 65年3月21日) 全集33、873頁

(28) 日本では、初めて離婚統計がとられた明治十六(一八八三)年、離婚率(人口千人当たりの離婚件数)が38と最高を記録し、その後も高水準を保つが、明治三十一年七月施行の民法で協議離婚制度が導入され、離婚は激減する。その後、現在にいたるまで明治期ほどの離婚率には達しておらず、世界的に低水準に留まっている。『家族データブック年表と図表で読む戦後家族一九四五—九六』久武綾子・戒能民江ら編(有斐閣、97年) 232頁、岩井紀子「離婚」(『現代家族の社会学脱制度化時代のファミリー—スタディーズ』石川実編、有斐閣ブックス、97年) 127頁、浅野富美枝「現代」(『家族と結婚の歴史』「新装版」森話社、00年) 189—190頁、厚生労働省HP「離婚に関する統計」([http://www.lnhw.go.jp/foukei/rikon\\_8index.html](http://www.lnhw.go.jp/foukei/rikon_8index.html))を参考。

(29) 野々山久也「離婚の社会学アメリカ家族の研究を軸として」(『日本評論社』85年) 12頁

(30) 原彬久「吉田茂—尊皇の政治家」(岩波新書、05年) 132—133頁

(31) ジョン・タワ「増補版敗北を抱きしめて—第二次大戦後の日本人」下、三浦陽一・高杉忠明・田代泰子訳(岩波書店、04年、原著99年) 387頁

(32) 北原恵「正月新聞に見る(天皇ご一家)像の形成と表象」(『現代思想』01年5月) 236—239頁。ア

ジアに女性ジェンダーを割り当てること自体、オリエンタリズムの常套であるのはいうまでもない。

- (33) ただし、本多は、29章において、朝鮮戦争の傷病兵たちと、それを眺める芸者たちとの様子に、「過去七年に亘つて支配してきた占領軍の兵士たち」の「ずたずたにされた男の性」と、「かつての勝利者たちの流した血から利得を得」た「敗れた国の女」の「奢侈な性」といった対比をとらえ、「燦爛たるもの」を感じている。ここでは、ジェンダー配置を織り交ぜながら日米の力関係が逆転的にとらえられているが、そうした本多の戦後日本に対する期待の高まりは、この直後のジン・ジャンとの戦後初の邂逅以降、彼女に純粋な（日本）を透視する営為へと発展していくと読める。

- (34) 原覚天・赤津学・小島清・崎山昭治・柳沢雅一・栗本弘によるシンポジウム「東南アジアの経済開発と国際分業―小島清「米・日・東南アジア貿易の基本路線」をめぐって」(『世界経済評論』62年5月) 40頁

- (35) ジョン・タワ―『吉田茂とその時代』下、大窪憲二訳(中公文庫、91年、原著79年) 62頁。こうした経済事情についてはブルース・カミングズ「世界システムにおける日本の位置」(『歴史としての戦後日本』上、アンドルー・ゴードン編、中村政則監訳、みすず書房、01年、原著93年) 101―113頁に詳しい。終戦直後アメリカは、共産圏に対抗すべく日本をアジアの自由主義経済圏の中心地に据えるため、東北アジアを日本経済の後背地とする構想をもっていたが、中国革命(四九年)と朝鮮戦争(五〇年)によって、東南アジアを後背地と定めるにいたったとされる。

- (36) 岩渕功一『トランスナショナル・ジャパンアジアをつなぐポピュラー文化』(岩波書店、01年) 10―14頁

- (37) 阿部潔『彷徨えるナシヨナリズム―オリエンタリズム／ジャパン／グローバリゼーション』(世界思想社、01年) 83頁

- (38) 「内なる他者」という言葉は、ふつう平田雅博『内なる帝国・内なる他者―在英黒人の歴史』(晃洋書房、04年)などのように、サイード的な帝国主義観に照らして、周縁化された異邦性を帝国が内部に抱え込んでいる場合に用いられる。だが、かつてオリエンタでありながら帝国主義を謳う唯一の近代国家だった日本においては、岩渕や阿部の指摘にあるように、東南アジアのみならずアメリカもまた一つの「他者」とみなしうると考え、この言葉を用いた。

- (39) 有元(注4前掲) 脚注12がレスビアンの周縁性を指摘している。

- (40) 竹村(注10前掲) 28頁

- (41) 五四年に、大戦後の民族解放運動と共産主義勢力を抑止するための軍事同盟、東南アジア条約機構(SEATO)がアメリカ主導で結ばれ(七七年まで)、その本部がバンコクに設置されたことを考慮すれば、最終章はタイの政治状況の寓意とも読みとれる。

※三島テクストの引用は、脚注(2)以外すべて『決定版三島由紀夫全集』全42巻(新潮社、00―05年)

に拠る。本文体裁の都合上、一部記号を変更した。尚、本稿は日本文学協会第26回研究発表大会(06年7月16日於・東北大学)での口頭発表に基づいている。発表に対して御教示を賜りました先生方に深謝申し上げます。

(二〇〇七年二月一日受理)

# Beyond Lesbian Representations :

## A Study of Yukio Mishima's *The Temple of Dawn*

TAKEUCHI Kayo

### abstract

Yukio Mishima's *The Temple of Dawn* (Akatsuki no Tera, 1968-1970), the third novel in *The Sea of Fertility* tetralogy (Hojou no Umi), depicts a climactic disclosure of lesbian relations between Thai Princess Ying Chan, the supposed reincarnation of a hero of the second volume *Isao Inuma*, and Keiko Hisamatsu, a highly Americanized Japanese woman. What kind of possibilities for readings can we find in this hybrid lesbian representation witnessed through the voyeurism of the protagonist and focalizing character Shigekuni Honda?

This paper notes that the time frame moves between before and after World War II and discusses Honda's voyeurism syndrome which develops suddenly in the Post-war. This dysfunctional gaze correlates with Isao's national fantasy of 'Japan' as pureness. Moreover, by reconsidering both representations of Ying Chan and Keiko, I treat their lesbianism allegorically as representations of a realistic national identity of postwar Japan tied economically and culturally to both Southeast Asia and the U.S.

I argue that, going beyond the representative power argued through lesbian feminist theory, the lesbian motif represented in the novel symbolically shatters the matrix of nationalistic and homosocial 'Japan' seen through Honda's gaze.

Keywords : Yukio Mishima's *The Temple of Dawn*, lesbian, representation as a text, others, Post-war